

少数者集團の心理學的考察

廣 田 君 美

一

まえがき

若し二十世紀の心理學者で不朽の墓碑銘を残しうるものありとすれば、凡ての人が第一にその名をあげるであろうとまでいわれたクルト・レビン (Levin, K.) は生涯の心理學的研究の後半を、貪欲な程の情熱を傾けて社會心理學にそそいだのであつた。彼ほど科學的操作によつて明確に集團のリアリティを證明しえた心理學者はいまだかつて現われなかつたといつても過言ではあるまい。

一體物理學では物を構成する素材の最少部分の實在が問われてきたが、社會科學においては實在を問われてきたものはそれと反對に全體であつた。即ち人間の構成する集團のリアリティが常に問題とされてきたのである。

確かに素朴に考えて人間の集合以上に集團の實在を目をもつて見とることはできない。社會科學において集團を個人に超越する實體と見なさ

少数者集團の心理學的考察

んとする社會實在論と、集團を單なる虚構と考え、若し集團の實在を認めるとするなら、個人の自然權を守るための契約にすぎないとする社會唯名論が對立のなかに経過してきたのもこの間の事情を物語るものであろう。社會心理學もまたその例にもれず、*vitalistic approach* と *atomistic approach* の兩立場が集團のリアリティを探索して、紛糾のなかに努力を重ねてきたのである。かかる相矛盾する兩立場を統合して、理論及び實驗の上で、最も明快に集團のリアリティを實證したのはまさしくレビンその人であつた。⁽¹⁶⁾彼のこの業績こそはもし社會科學が自然科學と同様な關心をもつて世の人に注目されるなら、物理學上の新物質の發見と同様に世界の賞讃を博したに違いない。何故なら彼の業績が發見されるや、社會心理學は明瞭に「集團という名の袋」にのみり多き諸事實を盛り込めるようになったのである。しかしかかるレビンの業績も彼の明敏なる頭腦のみによると考えるよりは、寧ろ彼にユダヤ人の血が流れていたという事實によることの方が多いのではあるまいか。

彼はユダヤ人という少数者集團のもつ宿命的な悲哀を身をもつて何度

も體驗したに違いない。一般に一研究者の強烈な體驗が天才を生み、新事實の發見に動機づけることのあるのを思えば、レビンのあの集團研究への異様な努力と、無比の貢獻は、彼が少數者集團の成員であつた爲に實を結んだのだと考へてもあながちうがちすぎではないようである。ちなみに彼は「社會的葛藤の解決」⁽¹⁷⁾という社會教育の實踐的プログラムを扱つた論文集の大半を少數者集團の心理學的問題にさいているし、日頃の冷靜な彼の論述もユダヤ人問題となると幾分激越な程の熱を及びてくることから、彼にとつては集團が單に學問的對象としてでなく、實際の人生上の問題として如何に重大な關心事であつたかが窺われるのである。更にレビンのかかる努力は決して學者にあり勝ちな講壇からの絶叫にのみ終ることはなかつた。丁度自然科学の新發見が工場などの生産過程を通じて一般社會に貢獻するように、これも彼の發見になるアクション・リサーチ(action research)という新しい技術によつて實際社會の福祉の爲に貢獻したのである。例えば彼は晩年集團力學研究センター(Research Center for Group Dynamics: 一九四五年設立)を始めはマサチューセッツ工科大学の附屬研究所であつたが、現在ミシガン大學に移管されている。)の所長の要職にあり、また彼の協力者と共に一方ではアメリカユダヤ人會議(American Jewish Congress)の下位組織である社會相互關係委員會(Commission on Community Interrelation)のメンバーとして、更にはコネチカット州の集團相互關係諮問委員會(Advisory Committee on Intergroup Relations)の協力者となつて、集團關係という現象に對して、この新しい方法を縱横に驅使し社會を變えようとする試みを續けていつたのである。勿論以上の如き集團間の問題、民族間の

問題は極めて高い割合で異民族を含めては、その解決は焦眉の急務であつたらうし、その爲に可能な援助は惜まれなかつたに違いない。^{註1}然しレビンのアイデアと科學的洞察がなかつたなら、これらの研究機關は陳腐な役所仕事に終始していただであらう。

思うに人生の營みは例外なしに偏見という色眼鏡で誰かを被告扱いにしたり、或いは集團は他の集團を、征服者は被征服者を、持てるものは持たざるものを、多數者は少數者を壓迫することによつて繰り返えされてきたようである。現在世界各國で積極的な宗教的奉仕を續けているカトリック教徒ですら、かつてのアメリカにおいては極めて強い偏見の對象であつたのである。^{註2}他方われわれはナチス・ドイツのユダヤ人集團に對する迫害や虐殺の事實を知つてゐる。更にこの事實はアドルフ・ヒットラーがドイツの一地方に發生しつつあつた偏見や葛藤を挑發し、ドイツ國民を躍らし、終には世界をも攻撃するに至つたのであつたことも知つてゐる。一方には現代のアメリカにおいて尙地下火山の如く不氣味に燻ぶり續けているニグロ、ユダヤ人、メキシコ人、東洋民族等に對する偏見、或いは我が國においても年來不當に偏見をもつて壓迫されている異民族や少數者集團が確かに存在するのである。

ここで國際的に見出される種々なる少數者集團の受難史を繰廣げるとはわれわれの當面の問題ではない。唯人間社會においては民族間や異文化間、利害を異にする集團間に憎しみという心の病が絶えず燻ぶり、常に少數者集團が攻撃の對象に取りあげられ、小さな地方的集團間葛藤が恰も一人の不注意から生じた山火事の如くに燃えひろがり、今日の暴動が明日の民族間戦争に發展する不氣味さははらむことを指摘して、將

來の集團間關係の科學的研究の必要性を強調したのである。戦争とは確かに國際的次元に生じ軍樂を奏て始める隣人間の争いである場合も多いであらう。残念ながら現狀においては政治的境界線は人間の憎惡に對する防壁とはなりえないし、地圖上の國境線ですら社會階級の底を流れる憎惡の擴大を防ぎえはしないのである。確かにウィリアムス (Williams, R. N.) の言うように⁽³⁰⁾、「世界の社會の何處においても、集團間の對立や葛藤の交錯した流れに影響されているのを容易に見出しうる」のである。

われわれがここで取扱う少數者集團とはかかる集團間葛藤の犠牲や憎惡の對象となつた人々なのである。或いは偏見という豫斷裁決^{註3}で無實の罪に落し入れられている困惑と憤懣に身もだえる人々の集團であり、更にはインキをつけさえすればいつでも同じように鑄物に刻まれた圖案を再生するあの「ステレオタイプ」^{註4}の如く、自己の具體的な經驗とは全く無關係に固定した表象の烙印を押しつづける人々の犠牲となつている集團なのである。

一體少數者集團の問題は差別的諸行爲 (discrimination) が法律によつて禁止された近代社會において初めてより明確な心理學的研究の對象となつたといえるであらう。この間の事情をレビンはユダヤ人の少數者集團をあげて巧みに述べている。⁽¹⁷⁾ 即ちゲット時代のユダヤ人集團では非ユダヤ人集團との間に明瞭な物理的制限と社會的境界があつた。従つて集團所屬性が明かであり、兩者間の障壁は極めて固いものであつたので、ユダヤ人集團に加えられる外部からの壓力は厳しく彼等の自由生活空間を極めて狭少ならしめる如きものではあつたが、かかる狀況では外から

の力は集團の枠にさえぎられて、個々のユダヤ人に及ばずそこで幾分なりとも各自の自由な領域を保ちえたのであつた。ところが解放後物理的障壁や、法律及び社會的制限が排除され、自由行動空間は擴大し、外部からの壓力は弱められた。尙兩集團を限る境界線は存在したけれども、以前の如き強固なものでなくなり、具體性の極度に缺けた不明瞭な社會集團間の境界となつた。従つてある個人にとつてはその境界は容易に通過しうるものとなつたのである。ところがユダヤ人はこの解放によつて決して實質的な解放を享受しえたのではなかつた。

今まで集團という明確な遮蔽物で直射光線を遮りながら生活してきた彼等は防壁を取除かれることによつて各自直射光線のまぶしさとまどいしてしまつたのである。解放によつて外部から集團にかかつてくる壓力は確かに弱まつたけれども個人にかかつてくる力の相對量はかえつて増加するというパラドキシカルな結果に至つたのである。かてて加えて解放前の多數者集團は法律や物理的障壁で少數者集團を完全に分離 (Segregation) することによつて彼等の優位性を保ちえたが、かかる形式的區別が取去られると、少數者集團の精神的缺陷や、無實の罪をあげきたてる心理學的差別^{註5}によつて飽くまでその優位性を誇示せんとするであらう。

このようにして現狀の世界に見出される如く、少數者は偏見の矢おもてにたたされ、一應許されている社會的地位上昇 (status climbing) の梯子をのぼり、全體的な文化への公道を踏み進もうとしたが絶えずあげ足をとらうとする意地の悪い多數者の監視の目を常に意識しながらとまどいせねばならぬのである。

従つて少数者集團の問題は過去においては多くは社會學の研究對象であつたが、種々なる障壁が既に人の心の中に潜在してしまつた今日においては寧ろ心理學の研究領域なのである。社會心理學に無縁である人、更には社會の表層にのみ思いをとどめる人は少数者集團の問題は近代社會の成立と共に終つたかの如き早計の結論を引出すかもしれない。然し眞に人間關係の科學は常識の終焉するここから始まるのである。

註1 アメリカの故ルーズベルト大統領は死の直前「若し文明を存續させんとするなら、人間關係の科學、即ち平和な一つの世界に共に働き、凡ての能力を認めまたそのように養成する科學をつくらねばならぬ」と書き残し、憎惡、恐怖、滅亡等の大破壊を避けるため残された唯一の手段として人間關係の科學の重要性を政治的問題として取りあげたといわれている⁽¹⁹⁾。確かに凡ゆる人種の *melting pot* といわれているアメリカの惱みは國內に頻發する民族間の葛藤の調整と豫防であらう。この爲にもかかる問題の科學的研究には多大の援助が與えられているのである。

註2 英領植民地時代のアメリカでは、カソリックの司教は極めて強い迫害や追放をうけた。またカソリックの辨護士は事務所を持つことを禁じられ、法廷で證言することも許されなかつたし、英國系の婦人との結婚も禁じられ、場合によつては財産すらも沒收されたのである。その後教會と州の分離が行われても、ニューヨーク州では一八〇六年まではカソリック信者は他の市民と平等な社會的地位を獲得できなかった。ニュージャージー州では約百年、ニューハンプシャー州では約八〇年前反カソリック教的諸法律をはじめて廢棄したにすぎない。

註3 偏見 *Prejudice* とはラテン語では「前もつての判断」*iudicium* *be* *forhand*、「豫斷裁決」*prejudgment* を意味する。豫斷裁決とは被告の答辯を聞く前に有罪であると豫斷で判決する裁判官の如く、不適當な證據に基く豫言である。偏見とはかくの如く判定者の感情が證據とは無關係に固執する一つの豫斷裁決なのである。

註4 ステレオタイプ *Stereotype* は新しい事實との接觸によつてほとんど變えられない。選擇的に働く知覺や記憶は偏見をもつ人にとつては、ステレオタイプの彫りを深く鋭くするものだけを選び、ステレオタイプを變えるような事實を無視させる。マロウ (Marow, A. J.) は次の如き興味ある例について語つている。ある男が戰爭中ユダヤ人はなまけ者だと主張した。ところがアメリカのユダヤ人は他民族よりも高い比率で徵用されている事實を聞いて、それは徵兵の爲の爲だといはつた。そこでユダヤの青年は他國人より多い比率で兵役に従つてゐる事實を明らかにすると、早く將校になりやすいように兵隊になつてゐるだけだと答えた。次いでユダヤ人は他の人種に比較して下士官のパーセントの高いことを知らされて、補給兵團や空軍で樂な仕事にありつきたいからなのだとつた。然しユダヤ人は實際歩兵、砲兵、工兵等のより勞働を必要とする部隊に配屬されていたのであつた。この事實を知るとその頑固者は次のように結論した「それはユダヤ人がかれこれ批判されたくないからで、よくみせる」ためにわざと振りをしてゐるだけなのさ」と。

註5 クレッチ等によれば⁽¹⁵⁾、差別的行爲の手懸りとなる差別態 (*discriminanda*) には、(1)皮膚の色、鼻の形等の身體的手懸り、(2)特定の職業等によつて區別せんとする社會學的手懸り、(3)話し方、口にする食物の種類、パーソナリティ特性等による心理的手懸りによるものがあることを述べている。一般に差別といわれる現象は上記のものが極めて複雑な形で混合して現われるものであらうが、(1)(2)などの外形的差別が法律等で認められている解放前などでは、心理的手懸りによる差別は現われ難いと考えられる。この心理的手懸りによる差別の働きうるのは開放されて境界の存在が潜在的なものとなつてからであつて、おそらく多數者が生活領域を侵害される脅威におびえて行ふ自己防禦的反應なのであらう。

研究の困難

現在のアメリカの指導的社會心理學者の一人であるリビット (Lippitt, R.) はかつて次のようにいつている。「現在では偏見をうちくたくより原子を分裂させることの方が容易である」と⁽¹⁹⁾。

確かに人間の間に存在する偏見の巨大な山を打ちくたく程に強力な科學的テクニックは未だ人間の手のものではない。この現在の人間の社會的な力と物理的な力を處理する能力の齟齬が一層人間を不幸にしているともいえるだろう。そしてこのような事實がかえつて皮肉にも社會科學に對する人々の偏見と不信を高めてさえているのである。社會科學は、かのニュートンが書齋の穴を通して射しこんでくる太陽光線から屈折という光學的原理を導きだしたり、メンデルが彼の庭園の緑と黃の豌豆を異花受粉させることによつて現代發生學の基礎を基きあげたような實驗室的靜けさの中には求められない。常に喧騒と非難にとりまかれながら科學的接近を試みることを要求されるのである。あまつさえ、例え明確な方法論をとりあげても、それを具體化し、そこに働く社會的概念や原理を分析しうるような簡単な社會的状況にづくわすことは難かしいことであり、かかる社會的状況を實驗的にデザインすることさえも容易なことではない。かかる事情が社會科學の出發をすつかりたちおくらせてしまつたのである。更にこれに加えて社會科學者は自然科學者達が決して體驗したこともないような障礙に遭遇することを餘儀なくされていた。これは單的にいつて自然科學が物を扱い、社會科學が多くは人間を扱わねば

ならぬという區別から生じてくるものであつた。例えばワイリー (Wylie, R.) が、「個々の科學は人間の誇りあるイリュウジョンを害わなかつた順に従つてあらわれてきたものであつた。數學は人間の虛榮心を害わなかつたので先づ最初にあらわれ、物理學は地球の尊嚴という人間のイリュウジョンを消すものであつたけれども、まだ人間の神祕さを害わない爲にその次にあらわれてきた。生物學は動物としての人間の研究を含んでいるので更に遅れて現われ、心理學に至つては、若し心理學を承認するなら無数の誇りある人間の制度が滅びるだろうという理由から今日においてもまだ忌避されているのである。」⁽¹⁵⁾と語つているように、社會心理學を含めて社會科學は人間を扱うが故に人間にポイコットされるという悲劇を今もつて實感させられているのである。況んや社會科學に對して極めて理解と信賴の乏しい我が國においては、以上に加えて更に何重かの障害の上に立たされることは當然である。われわれがここに少數者集團の問題をとりあげた大きな理由は、我が國においてもいつかは解決されねばならない少數者集團を含みながら、問題の特殊性を強調するあまり、世界的な一般的現象としての少數者問題との比較對照を怠り、問題の科學的究明を無視している現状に對する反省であり、一つは我が國の少數者集團研究の進歩を促そうとしたものなのである。

不幸にしてわれわれは少數者集團の研究を意圖しながら、我が國の研究のデータを利用することができなかつた。このことは勿論かかる集團に對して社會科學的なアプローチがとられていないことを意味すると共に、心理學の見地からの研究がほとんどなされていなかったことを物語るものであろう。研究することは活動することであり、活動することは研

究することであるという力強いアクション・リサーチの科學的信念につらぬかれて、大数の研究機關を統合し組織的にデータの蒐集に努めているアメリカの現状と比較して、我が國にかかる集團に働きかけている研究機關のあることもまだ寡聞にして聞いたこともない。種々なる試みがなされつつあるようで、その實、研究は困窮しており、非科學的であり、形式的でさえあつて何もなされてはいないようにも窺われるのである。

従つてここで將來の研究を容易ならしめる爲にも、この障のいくつかにわたつて検討するのもあながち無駄なことではあるまい。

(1) 我が國においては社會科學なるものは科學としてよりは、寧ろ抽象的な哲學、乃至はヒュマニテイに基く社會奉仕の一部門であると考えられている人が多いようである。従つて哲學者や社會評論家と名付けられる人々は、まさしく自分達は社會科學の専門家であるという盲信におちいつている。それ故、社會科學的な研究のテクニクや、特別な技術的訓練の必要性を認めようとはせずに、唯警世の名句や絶叫だけが問題を解決しうる最善の方法だと考えているのである。(勿論彼等の考え方の根底には、科學が現状をあばきたてる鋭さに脅威と反感をひめてはいるのだが。) 然し慈善家やヒュマニストや博愛主義者達になると更にオペティミスティックであり、ナイーブである。彼等は丁度宣傳で品物の賣上げをよくできるのと同じに、「善意も人に買われる」ことを素直に信じている。科學の裏付けなき善意が結局は何の役にもたないことをしらないで、社會科學のメスの入るのを拒みつづけるのである。唯「愛情と善意が凡てなのだ」と。かかる取扱いは少數者問題の場合一層顯著に現われてくる。「現状のままにしておくこと」が事態の最上の解決策であると

信ずる彼等は往々にして宗教家や誤つた教育者が取つたと同じように、少數者達に「氣やすめ」を與えることによつて問題の根本的解決をおくらせるのである。彼等はこの際このような方法は今まで何度も繰返えされ、その度に失敗を重ねてきたのだということを知る必要がある。

(2) 現況の社會で既に既得權を得ている人は改新を必要とする實行や状況をあばきたてる事實の穿鑿を好まない。例えば會社の理事者達は社會科學が會社の種々なる經營方法や管理を考えなおさなければならぬ事實をあばきたてたら激しく拒むに違いない。或は社會でうまくやつている人々は自己の不利に直面する事實の發覺を恐れるに違いない。このようにして社會科學者が餘りに多くを知りすぎることが人々の偏見をよびおこすのである。「社會心理學者は何にも知らないのだ。」という攻撃は社會問題處理に對する科學への強い恐れと不信を表わすものなのである。少數者集團の場合でもこれと同じであらう。ある人は「その問題は現在では既に解決された問題ではないか」と問うように、多數者集團の關心外であるものは、いかに少數者にとつて深刻な問題であつても、研究への協力を喚起することは難しいのである。更に多數者達がそれがあるが故に幾分なりとも社會階層上での優越を誇りえたとするなら、眼前からその犠牲者を失つて足場のぐらつくような脅威は恐らく感じたくないに違ひなからう。

(3) 殘念なことには我が國の傳統的な官僚政策の爲に社會を對象とする研究すらも學者の手には自由に委ねられなかつたのである。人は官廳での凡ゆる社會の領域に亘る部や課の看板の數に壓倒されるに違ひない。何の科學的素養もない、唯經驗と熟練を賣り物にする役人達が、視察な

どの古めかしい形式的調査で何とむなし数字をならべあげていることか。彼等にとつては人間が完全に数字におきかえられるだけであつて、数字の多少や變化が具體的な社會の中でどのような科學的法則的意味をもつかは問題ではないのである。更に少數者集團の問題にしても、やたらに橋をかけたり、道路を造つたりしているが、それに先立つて集團間の *communication barrier* を取除かなければならないという社會科學的な問題にはいささかの反省もないのである。自然科學の發達の結果としての文明の恩恵を興えてさえやれば、少數者集團の問題は全く解決されると思つてゐるのである。しかも彼等の思い上りと狹量はおのづと社會科學の専門家を自負せしめ、學者の純粹な科學的研究に對して著るしく冷淡且つ妨害的でさえあるのである。彼等はいふ。「學者に何ができないものか」と。そして新聞の切りぬきや確信のもてない帳簿を毎日つみあげていくのである。

(4) 工場の社會的雰囲気が生産率に著るしい影響を興えるという從來の社會心理學上の發見を語ると、我が國の資本金及び労働者達は口をそろえて「然し我が國の特殊事情は……」という。一體特殊ということは科學的研究のらち外にあるという事を物語るものではあるまい。特殊であるか特殊でないかさえも研究の結果としてのデータから考えられることなのである。どこが特殊なのかの充分な分析すらなく、いたずらに科學的調査や研究から手を拱いて過去の誤りを繰り返すこと程馬鹿げたことはない。我が國の少數者集團にしても、かつては特殊部落などと呼ばならわされてきた如く、この特殊性の強調が恰も科學的研究の範圍外にあるような印象を興えてきた。皮膚の色や顔の形などの身體的特徴で

はなんら區別されるところはなく、唯歴史的因襲性によることを主張する餘り、かつてのアメリカにおけるカンソリック教徒や、現在のユダヤ人やニグロなどの少數者集團とは全然別個の問題のように考えてきたのである。然し歴史的穿鑿や發生の原因がどうあるとも、かかる文獻學的的研究が少數者集團の問題を解決しうることは少いであろう。現に差別を蒙つてゐる事實があれば、その強さや方向等を徹底的に究明し、所謂差別のインデックス註1 (*discrimination index*) を明かにすることによつて實態を探りえ、特殊性を特殊性として位置づけられるのである。原始民族はじめ少數者集團等を對象として取扱う社會心理學は、ある集團が一般社會の種々なる基準から脱逸するその特殊性をこそ研究するのである。

(5) 人間の自我に牴觸するものは、たとえいかなる研究であれ、グループや隠しだてによつて妨げられる。暗黒時代の自然科學者や革命期の社會科學者達はいかに多くの迫害や犠牲を蒙つてきたことか。

少數者集團の研究の場合においても同様のことかみいだされる。恐らく今まで何度となく科學的研究が意圖されながら、それ以上の痛手や傷口をむきだされる苦しさになえかねた少數者集團は激しく研究への協力をこぼんだに違いない。この事實が我が國における少數者集團の科學的研究を遅らせる大きな原因となつたのであろう。我が國において少數者集團の歴史學的考察や、その名稱の變遷を問題とした文獻學的的研究の多いというのも、問題の周邊部を堂々廻りしなければならなかつた科學者達の困惑を物語つてゐるようである。

特に我が國の如く、少數者集團に對する差別が潜在化されているようにみえる現状では、少數者達は長い間の屈辱と差別に馴れ、諦めと強い

堪性 (*tolerance*) をもつに至つたに違いない。かかる場合、たとえそれが將來の解決の爲の最上の方策であつても、「眠つている子をたたき起す」ような苛責なき質態の科學的暴露は、彼等の強い抵抗を喚起するだろう。かかる事情が彼等に「學者は唯研究の興味の爲にやつていただけで同情がない」という怨嗟と非協力的な態度をうえつけ、研究をますます困難なものとしている。丁度手術しなければならぬ恐れから、根本的治療を怠つて、まじないや宗教に同一化する患者と同じように、氣やすめや現状との妥協を説く善意を賣りものにする自稱科學者達の方が、彼等にとつては有難いのである。

更にその他我が國では結論が既に於いて、少くとも社會に何らかの積極的效果をもつものでなければ研究の財政的援助が與えられないという社會科學者の隘路がある。従つて何らかの結論を求めようとする學問的探索は、これらの障礙に打勝ちうる程の強い學者の情熱と、社會科學は社會を困亂させるといふ八方からの偏見をくださう程の強い處世のタレントを必要とするのである。

従つて今ここでさしあたつて心理學上の諸發見に基いて一般に少數者集團の成員は何を感じ、考え、行動しているかの心理學的特徴をとりあげることから、問題の實態把握と解決への第一歩の一助にしていこう。

註1 マロウによれば、差別のインデックス (*I. D.*) とは丁度知能研究における知能指數 (*I. Q.*) の如きものである⁽¹⁹⁾。この指數は種々カテゴリー I における差別を測定する工夫であり、法律家の如き實際家ですら簡単に利用できるものでなければならぬ。方法としては特權を有する人々と特權の少ない人の間の差のパーセントであらわす。例えば一時間の給料を例にとると白人の平均賃銀が一・四九ドル (これを 100 パーセント

とする) であり、ニグロが一・〇八ドルなら、これは白人の七二・五パーセントに相當し、その差の二七・五パーセントがこの場合の差別のインデックスとなる。このようにして居住地域の制限、職業等の各領域で種々なるインデックスを検討することができるのである。

三

少數者集團の心理學特徴

一體ある集團の成員となることはその集團成員を規制する集團の諸種の價値や規準に同調することを意味すると共に、同時に成員となることによつて始めて許される諸種なる活動や權利のあることをも意味するであらう。然しかかる集團に許容された行動のパターンのみでは、成員に相對な地位意識 (*status consciousness*) を發生させるには至らない。實際に個人が行動領域の狭いこと、特權に薄いこと等の少數者集團的自覺をもつのは、優勢な他集團成員と共通の狀況に参加し、比較參酌することによつて始めて可能となるのである。

以上の事情はアメリカにおける各國からの移民の行動から明瞭に理解できる。一體これら移民は實際に彼等の行動が差別され制限されている少數者集團なのであるが、一世といわれる人々は通常言語が通じないという理由や、更には彼等の組織化された集團的生活に基く地域的隔絶から、一般社會における(彼等をも含めた)地位差別 (*status differential*) に對して殆ど意を拂おうとしない。ところが所謂二世といわれる彼等移民の子供達は、優勢な多數者集團の言語を驅使できるようになり、學校その他の公共施設で相互に接觸交渉の機會をもつにつけて、彼等少數者集團への種々なる制限を體驗するに至るのである。それ故二世は一世に

比して著るしく社會的地位意識に敏感であり、彼等の地位の低いことの自覺から、種々なる不適應行動を現わすのである。例えばジョンソン等⁽¹³⁾ (Johnson, C. S. and Masuka, J.) は日本の二世について、チャイルド⁽⁵⁾ (Child, I. L.) はイタリヤの二世について、かかる事情を明瞭にし、二世の往々に示す兩親達への叛逆は、多數者集團に方向づけられた強い地位の上向移動^(upward mobility)の慾求と所謂集團への忠誠の葛藤にもとづくものと解釋している。ところが少數者集團成員のかかる不適應行動は前記の精神的葛藤によるもののみとは考えられない。一體上向移動の慾求は通常二つの力によつて阻止される。即ち自己の集團のもつ種々なる魅力であり、集團への忠誠^(loyalty)である。然し更に強烈な障礙は多數者集團側からの拒否なのである。したがつて少數者集團成員の示す種々なる不適應行動は、個人の努力に拘らず、多數集團がその成員たることを承認しまいとする外的拘束力に結果するものと考えられよう。

たとえば態度の發達的研究を意圖した多くの心理學者達は、少數者集團に對する露骨な拒否が驚く程早い年齢にみ出されることを報じている。ホロビッツ^(Horowitz, E. L.)は種々なる社會的状況における人種的偏見を取扱つた實驗において、既に就學前兒童に偏見の見出されることを報じ⁽¹²⁾、ニグロに對するソシオメトリーによる調査でも、幼稚園期において既に明瞭なニグロとの接觸拒否の事實のあることも報告されている⁽²²⁾。更にベッカム^(Beckham, A. S.)は少數者集團成員が差別や拒否等の卑屈な經驗をした年齢を調査して、大人子供を含めたニグロの代表的サンプルでは平均一―一二歳の時にかかる經驗をするものが多いことを報じている⁽²⁾。以上の結果の示す如く、少數者集團成員が比較的早期の

少數者集團の心理學的考察

人生途上で強い外的障礙に遭遇するものなら、その態度、行動、パーソナリティ等に對して、いかなる影響を與えているだろうか？ その主要な特徴について簡単に概観してみよう。

(1) 多數者集團の價值や基準の採用 人は往々にして自分より高い社會經濟的地位をもつた人、教育レベルの高い人を友人として指名したり、自己の主觀的な社會的距離が近いように感じたりすることのあるのは、社會的距離尺度^(social distance scale)を用いた實驗によつて報告されて⁽⁸⁾⁽¹⁸⁾いる。これ等は個人が社會の地位階層^(status hierarchy)において主觀的により高い地位と一致したい、上位階級に所屬したいという強い上向移動の要求をもつことを示すものでもあろう。少數者集團では特に上向移動への要求が極めて強く働いたため、多數者集團の種々なる生活領域における集團の標準と主觀的一致をとりいれることが多いといわれている。例えばハワイにおける日本人の少數者集團は人口の上からはかなりの割合を占める少數者集團であるが、彼等もそこで優勢な白人集團が他の各集團を品等するとはほぼ同じ順序で品等づけるといわれている。(勿論日本人集團を白人の上位におくという例外を除いてである)或いはブラジルでは原住民のインディアン、ポルトガル人、ニグロ等の雜婚により殆ど人種の區別がつかぬ程であるに拘らず、皮膚の色により白いか黒いかによつて社會的階級が區別されているのも、白人の社會階級の基準をそのまま受入れているものと考えられよう。皮膚の濃淡が社會的層化の基礎となる事實はまたアメリカのニグロにおいても見出されているところである⁽²³⁾。

一方又ニグロの兒童や學生は、民族的好悪や社會的距離に關して、白

人の多數者集團が評定すると同じ基準で他の集團を評價するともいわれている。⁽¹⁾⁽²⁾更にアメリカのニグロ大學生は、白人の多數者集團によつて、彼等少數者集團に歸せられている非好意的なステレオタイプさえもつけられることが時をへだてた二度の調査によつて發見されている。⁽²⁰⁾

いまここで大社會の中でユダヤ人の少數者集團がもつ同様な態度を實驗室の中で實驗した興味ある試みについて検討してみよう。

フュスティンガー(Festinger, I.)⁽⁶⁾はお互いに全然未知である異つた大學から女子學生を被験者として選び十人づつの十二集團をつくつた。各集團は三人のユダヤ人と三人のカソリックの女子と四人のサクラから構成されていた。勿論六人の被験者達は四人のサクラも自分達と同様な理由で集められた普通の被験者であると思ひこんでいたのであつた。これ等被験者は一室に入れられ、「實驗の目的は人の投票の仕方を研究すること。この會を大學のクラブ會合と想定して、ここからクラブの會長を選ぶ。投票は各自一〇票を自由に行使できるが自分を選んでほならない。投票結果から二名の最高得點者を會長の候補者とし、その後最後の投票を行う。」といった風の指示が與えられ、自分の名前と所屬大學と住居を公表しなければ何を話しあつてもよいことにした。またその名前から宗教的所屬が暴露されないように凡ての被験者を簡單に番號で區別した。投票は紙の上に書くようにしたが、各投票者が誰であるか判別する如き特別な目じるしがつけられてあつた。各集團に所屬する投票計算も勿論サクラで、常に投票を算定する振りをしながら、あらかじめ仕組んでおいた通り集團の四人のサクラの内二人が最高得點者として指名されるようにしてあつた。(四回投票したので各集團の四人のサク

第1表 指名投票の平均數

	identification 前	identification 後	差
カソリックからユダヤへ	10.7	7.3	-3.4
カソリックからカソリックへ	9.3	12.7	3.4
ユダヤからユダヤへ	9.8	10.3	0.5
ユダヤからカソリックへ	10.2	9.7	-0.5

ラは實驗前に仕組んだ組合せにしたがつて、一人二回づつ計八回の最高得票者となるようにしてあつた。(二回の投票後、豫定の計畫として投票計算者が數字番號で名前を代表することは投票を極めて困亂させるから、各自の名前に變更することを提案する。實驗者はしぶしぶ承認し各被験者に名前と宗教的所屬を公表させ、これを黒板に列記する。四人のサクラの内二人はユダヤ教徒を粧い、二人はカソリック信者の振りをした。従つて一集團五人づつのユダヤ人とカソリック教徒より成つてゐることとなつた。その投票の結果を圖示すれば第一表の如きであつた。

即ちカソリック教徒は名前と宗教的所屬を公表した個人的區別 (*self-identification*) の後では、よりカソリック教徒に投票し、ユダヤ人に對しては投票數が減少する。(この差は統計的に有意なものである。)これに反してユダヤ人はこの *identification* の前後で殆どその投票を變えない。^{註1}この結果からユダヤ人は常に彼等の同胞に對して特別な好みを表すよりは投票に對して公正であろうとし、他の集團の人と接觸する社會的状況では一般社會の中で通用する行動の基準に則つてできるだけ承認をうけるような行動をとらうとすることが判明するのである。後指をさされまいとする少數者集團成員の承認を求める強い要求が、かかる複雑な社會的モデルの中にさえも現われてくるので

あろう。更に興味深いことは、少数者集團の成員は多數者集團成員と混在する狀況では、社會的に承認されるか拒否されるかに關して極めて不安定な氣持をもつてゐるということである。^{註2} 例えばフェスティンガーはこの實驗と平行して、一九人づつのユダヤ人とカソリック教徒が唯投票者としての役割をもち、別に一〇人（五人ユダヤ人、他の五人はカソリック教徒）が投票の受け手である狀況を設定し、受け手の名前と宗教的所屬を公表する前後二回づつにおける投票の變化を調べたところ、今度はカソリックは前後に差がなく、ユダヤ人は公表後ユダヤ人への投票が増加した結果をみ出している。即ちもはや投票者が自分に投票される機会をもちえないし（受け手が別にあるので）自分の宗教的所屬が公表される（換言すればユダヤ人であることが大衆の前にさらされる）心配のない狀況では——即ち個人がアノニムな聽衆の立場でありうる狀況では——個人的な承認をえたいという要求は多數者集團への同一化よりも、自己の所屬集團への同一化に方向づけられるのであろう。

一般に多數者集團の成員は、彼の態度や種々なる行動の基準が、他の周圍の支配的な文化と調和していることを當然のこととして安心し思い悩むことはない。しかるに少數者集團の成員は、かかる安定した適應的行動をとりうる程に特權を與えられていないのである。常に自己の所屬する少數者集團の態度と、これに對する社會の人々の態度を對照しなければならぬ。彼は所謂周邊人(marginal man)として兩集團の接合點にあり、そのいずれに所屬しているかさえ明かでない場合も多い。かかる狀況において多數者集團を自己の基準系集團(reference group)としてとり、少くとも心理的に多數者集團と同一化を計ろうとするのは當然

のことでもあろう。

(2) 自己集團に對する自己嫌惡　チャイルドはアメリカへのイタリヤ移民の二世が親達に明瞭な敵意を示すのを見出している。彼等はイタリヤ人集團、その指導者、集團の種々なるシンボルをうけいれようとはしないといわれている。⁽⁵⁾ カナダにおけるフランス人及びイギリス人、インドにおけるヒンズー教徒及び回教徒、アメリカにおけるニグロや各國からの移民等の所謂少數者集團成員は多かれ少なかれ、同様な自己嫌惡(self-hatred)の根強い病に神經をすりへらしているのである。ユダヤ人集團には絶對寄附をしないユダヤ人、ユダヤ人の店員を絶對備わないユダヤ商人、目前で激しく同胞を罵倒する少數者成員、或いは我が國少數者集團においても應々にして目撃される内輪争いや繰り返される親子間の葛藤、更には自己の集團には全然目もくれずに、他の集團のもつものもの價値に心をひかれて奔走する人々。レビン⁽¹⁷⁾は豊富な例を引用しながらユダヤ人にみられる自己嫌惡を問題とし、少數者集團成員の自己嫌惡は決して精神病學的現象ではなく、個人のおかれてゐる社會狀況の心理學的現象であつて、少數は神經症その他の異常なパースナリティから生じたものもあるが、大多數の事例は正常な精神的健康をもつ人の社會心理學的現象であることを強調している。前にも述べたように、少數者集團成員は集團から離脱したいと思つてゐるに拘らず、集團内にとどまることを餘儀なくされている。そこでこれらの成員には、その所屬性を恥じ、劣等視する傾向が見出される。従つてできるだけ自身の集團の特徴を現わすものから遠ざかろうとするに違いない。自身の集團に固有と考えられるものもろなるシンボルや態度及び諸行動を、友情のない

多數者の眼や價值尺度を借りて低く評價するのである。ところができるだけ「彼等らしいもの」から遠ざかろうとしても、多數者によつてつくられた障壁に遭遇すると強いフラストレーションの状態におかれてしまうのである。従つて少數者集團成員の經驗する自己嫌惡は、多數者の設定する *communication barrier*、體驗する特權の少なさ、自己に課せられた上向移動の禁止等に原因する深いフラストレーションに根ざすものであろう。更にはある人が典型的な少數者集團成員であればある程、また彼の行動のパターンや文化的シンボルが典型的なものであればある程、自分をどうしても他の成員達から切離すことができない、或いは過去の自己の諸行動と完全に切離すことができないという憤懣が自己嫌惡としてはねかえつてくるのであろう。更には自己の集團と多數者集團の周邊部に位置することが、かえつて彼に二重の忠誠を要求するという葛藤となり、自己嫌惡に火をかけるに違いない。然し以上の理由による少數者集團の強い緊張が勿論常に所屬集團や自分にむけられるとは限らない。フラストレーションの原因として障壁をつくる多數者集團にむけられることのあるのは當然である。ニグロによる白人へのステレオタイプが多數の敵意を含めているのも發見されているし、實際集團間葛藤の多くはこれに基くものと考えてよからう。然し多數者が強力すぎて攻撃の對象とならない場合、またフラストレーションの第一の原因が多數者の縮出しによるよりも、まづ自己が少數者集團の成員であるからだと思える場合、自己の集團に對して攻撃が加えられていくのである。そして實際攻撃が外に向うよりは自己の所屬する集團に向けられることの方が遙かに多いのである。またこの自己の集團への敵意は多數者集團から加えられ

る誹謗的評價をうけられることによつて更に強められていく結果となるのである。

(3) 集團的諸特徴の隠蔽　テイボー (Thibaut, J.) は實驗室で特權に恵まれた集團と特權に薄い集團との集團關係を實驗した。彼はリレー・レース、馬飛び、ボールの的あて等の遊戲的状況を設定し、特權に恵まれた集團ではこれらの状況で常に自由に遊戲をたのしむことができるようにしたのに對し、特權に恵まれない集團は例えば馬飛びでは常に馬になり、ボールの的あてでは的の持ち役になるといつたように召使的役割に甘んじなければならぬようにした。その他の集團の諸條件はできるだけ均等にしても、集團に對する魅力が異り、集團の社會的地位に差が生じてくると、集團間のコミュニケーションは上位集團から下位集團に向うものは減少し、下位集團より上位集團に向うもの多くなる傾向を見出した。⁽²⁹⁾ またケリー (Kelly, H. H.) は同様に實驗室の中で固定した上位集團 (*high status nonmobile*)、下位へ移行可能な上位集團 (*high status downward mobility possible*)、固定した下位集團 (*low status nonmobile*)、上位へ移動可能な下位集團 (*low status upward mobility possible*) の四種の集團を實驗的に設定し、隣合う室に組合せた二組づつの集團間で、性質及び魅力は異なるが集團間のコミュニケーションが、即ち兩室間の文書によるコミュニケーションがなければ解決されないような課題を出した。その結果によると階層中の地位がより好ましくないものになるに従つて、當面の課題解決に關係のない内容をコミュニケーションすることが多くなり、これはより望ましくない位置を占める人をそこから除こうとする機能をもつていること、また實際の移動の可能性の興え

られていない下位集團では、コミュニケーションは事實上の上向移動の代償として役立つことなどを見出している。⁽¹⁴⁾

これらの實驗結果は概して次の事實を示唆するようである。即ちレビンも⁽¹⁷⁾のように、特権を有する集團の個人成員に働く種々なる社會的力は、その集團の中心層に向つて方向づけられているのに反し、特権の少い集團成員に作用する諸力はむしろその集團の中心領域から遠ざかる方向に方向づけられている。換言すれば多數者のより高い地位に向うべく方向づけられている。その結果として上位集團に所屬を求めようとするコミュニケーションの多くなることを物語っているのである。いわば特権の少い集團成員は、多數者によつて設定された障礙を何とかして越えようと努力しつづけることの證據なのである。そしてこのような努力の營みの一つの現われが、財力、教育等々の地位上昇の手段獲得に費やされていくのであろう。ところが多數者によつて維持される障礙を越えうるにはこれだけでは充分ではない。少數者集團成員をしるしづける身體的特徴や、言語的特徴などの種々なる特徴を除かなければならないのである。更には他の少數者集團成員との個人的關係の續く限り、多數者の中には入りえないのである。従つて少數者集團成員は多數者の眼前では他の少數者との社會的接觸をしりぞけることによつて自己の地位を隠蔽しようとするのである。ユダヤ人が自分の子供にキリスト教を信仰させて洗禮をうけさせたり、ユダヤ人の娘が自分の両親がアメリカ生れだと嘘をついてみたり、或いはチャイルドの調査したイタリア二世の叛逆グループ等の如く、非イタリア人が好きでないに拘らず、非イタリア人を友人や戀人や仕事仲間として求めようと努力したりするのはこのよ

少數者集團の心理學的考察

うな例を物語るものであろう。又ボザード (Bossard, J. H. S.) は二國語を使用する移民家庭に育てられた一七名を調査して、その話し方とか、できるだけ目立ぬようにする振舞とか、こせこせした英語の發音とかが共通に觀察され、かかる工夫によつて少數者集團成員性を隠そうとしていることを見出している。⁽³⁾これ等は凡て多數者との共通な狀況内に入ることによつて少數者集團の特徴を隠蔽し、種々なる *communication barrier* や、外見的差異を除去せんとする努力なのであろう。ところが自己の地位を隠そうとすることは、個人の緊張を高めかえつて落つきのなさと不安を生ぜしめることが多いであろう。彼等は求めながらも多數者集團の中では落ついた、アット・ホームな氣持をもちえないのである。恐らくかかる事情が彼等が多くは密集した居住地域の枠を自ら破りえない理由の一つなのでもあろう。先にのべたフェスティンガーの投票における集團所屬性の問題の實驗も、ユダヤ人學生の集團所屬性の隠蔽の心理的メカニズムを語るものでさえあつたのである。

(4) パースナリテイの不調和 少數者集團成員は彼等に課せられた種々なる障礙や、所謂周邊人の性格から多數者集團成員には經驗されないフラストレーションや精神的葛藤に遭遇する。かかる經驗が彼等のパースナリテイをある程度歪めることのあるのも容易に推察されることである。しかも少數者集團成員のかかるフラストレーションや葛藤が社會的生活にとつて必要なものうち、最も重大且深刻なものから由來する限り、緊張解消のダイナミズムが不適應行動に結果する可能性は、他の集團の何れの人々よりも多いであろう。ブレナン (Brennan, M.) は同じく中流階級に屬する家庭の少女であつても、ニグロの方が白人よ

りもより感情的に不安定であることを見出しているし、一方スパー
(Spoerl, D. T.) は同様なサンプルとして得られた二國語使用の家庭と
英語だけを使う家庭のそれぞれからきていた大學生を比較して、前者の
方がより感情的に不適應を示していたこと見出している。⁽²⁷⁾ 更には文化的
葛藤が強い精神的葛藤を生み、それが個人に落着きのない、均齊のとれ
ない行動を生ぜしめることはレビンによつても指摘された。⁽¹⁷⁾ 彼は所謂ユ
ダヤ人の落着きのなさを生れながらの特性ではなく、その置かれてい
る社會的状況の結果によるものであることを強調し、パレスチナに居住す
るユダヤ人の顯著な特徴の一つは他の國のユダヤ人に共通に見出される
この落着きのなさがみられないことであるとのべている。確にかか
る少数者集團成員に共通な精神的不安定性 (*insecurity*) とは、恐らく何
時、何處で彼等に對する偏見や差別的行為に遭遇するかもしれないとい
う不安に基くものである。或いはまた個人の要求水準と、そのの
許容された限界とのくいちがいに基く精神的葛藤の函數なのでもあ
う。そのいづれにせよ、彼等の怒りつばさ、落着きのなさ等の精神的不
安定は一つの特徴として考えられるようである。^{註4}

(5) 態度の不寛容さ 苦痛な經驗を味つた人は、將來再びかかる經
験に遭遇することに對して極めて警戒的になるだろう。それと同様に少
數者はひと度偏見や差別待遇に直面するとその後の行動は極めて隱蔽的
且警戒的なものとなる。丁度虐待にあえぐ繼子がうわ目づかいて人の顔
色をうかがうように、人をみれば自分にとつて味方か敵かを速かに且明
確に二分することが必要となる。少数者集團成員が多數者集團への境界
を横切ろうとするためには、そこにおける彼等の不確實な地位、漠然と

した不馴れた状況を明確にしていくことが要求される。従つて差別を蒙
つたり、偏見を浴せかけられたりしないで、障礙なしに通過しうる爲に
も、接觸する人々を敵か味方の極端なカテゴリーに分類することが先ず
必要なのであろう。彼等の警戒的態度は遭遇する人や、他の種々なる知
覺對象を瞬昧さのままに残すことはできない。少数者集團成員に對して
いろいろの態度をとる多數者や、彼等の耳に入る種々なるインホメイ
ション等が、彼等にとつて味方か敵か、好意的なものか、非好意的なもの
かを選別すること、このことが彼等の適應を安定したものと爲す爲の先
決課題なのである。もつとも對人關係や、利用しうるインホメイション
等に對し、自己の判断のスケールの上で好意—非好意の兩極端に介在す
る中間地帯をそのまま承認しない態度、換言すれば中立的なもの無關係
なものさえも兩極いづれかに分類しつくしてしまうという態度の許容領
域の狭さは、所謂「ambiguity tolerance の低さ」として專制的社會狀
況での生活を餘儀なくされる人々の態度の特性である。⁽¹⁾ 然し殆ど例外な
しに少数者集團は社會的壓迫や專制的力の支配下にあつたか、或いはた
とえ自由を委ねられていたとしても、「自由の中の奴隸狀態」とよばれ
るような生活を送つてきたことを思えば、先にのべた寛容さが彼等にお
いては極めて低いことも推察されるであろう。かかる他者の態度に對す
るある種の警戒と不寛容 (*intolerance*) は、一方では勿論人格の硬さ
(*personality rigidity*) に關係すると共に、他方では強く敵對的態度
(*hostile attitude*) に關係する。もつともこの敵對的態度とは先にのべ
た少数者集團成員のそれぞれの行動徵候群 (*behavior syndrome*) の底に
横わる極めて複雑な複合的態度であり、少数者集團成員の心理的特性は

かかる敵對的態度で代表されうるものでもあろう。然し少數者集團成員が特有の色眼鏡やひがみをもつとするなら、この *ambiguity tolerance* の低さからくる態度の判断尺度の歪みにも歸せられるものではあるまいか。更にはこの不寛容さは他面少數者集團成員の *ethnocentrism* にも關係しているようである。然しこの *ethnocentrism* は「他の凡てが自己の集團に關係づけて尺度化される」というネガティブな意味であつて、自己の集團の優越性にむすびつくものではない。

以上少數者集團成員の心理學的特徴をいくつかに分けて考察してきた。然しこれらの區々の特性は具體的に獨立して觀察されることは少い。それぞれが他の原因となり、結果となりからみ合い、複雑な少數者の特徴を形成していると見るべきであらう。

註1 同様な他の被験者からなるコントロールグループを用意し、四回の投票を個人の名前や宗教的所屬を公表することなく番號のみで行わせたところ、前後二回づつの差が全くチャンスによる差であることを見出ししている。それ故實驗グループの投票の前後における變化は個人的な *Identification* にもとづくものであると考えられる。

註2 レビンはこれと同様なユダヤ人の行動をたくみに語っている。⁽¹⁷⁾「あるユダヤ婦人が友人（非ユダヤ人）とレストランで食事をしていたが、他の二人連れの客が酒に酔い不作法に振舞うので迷惑がった。彼女はひよつとするとその人達もユダヤ人かもしれないと思つたのであつた。ところが友人がはつきりとユダヤ人でないことを言つたのでホツとしてそれからこの連中の大騒ぎをむしろ面白がつてみていた」と。即ちフェステンガアの實驗結果に示される如く、少數者は具體的社會狀況において常に多數者と相對的であり、所與の狀況にのみ規定される行動の可變性の多いことはまた彼等の中間人的特徴を語るに充分であらう。

少數者集團の心理學的考察

註3 基準系集團とは個人が自身をその一部分として關係づける集團、或ひは心理的に關係づけようとのぞむ集團をいう。⁽²⁵⁾⁽²⁶⁾

註4 勿論少數者集團成員の示す不安定性は、ここに述べた理由のみによるものではない。基準系集團という觀點から考えれば、個人は自身を關係づける基準系集團が不安定なのである。多數者または少數者のいづれの集團にも固く結びつきえない。即ち兩集團が基準系集團でありながら、共に不安定なのである。従つて個人がいだく落つきなきも、所屬をもとめる兩集團の價值尺度の喰違ひからくる彼等の位置の周邊性に深く關係するのである。

四

あとがき

讀者はこの少數者集團の心理學的分析で、重大な若干の問題の遺漏に氣づかれるであらう。即ち第一には少數者集團とは一般の社會的階層の分類の枠外に存在するある特殊な集團なのか、或は近代社會においては所謂社會經濟的水準の低位性に起因する下層階級として考えられるかの考察の視點の不明確さである。然しかかる問題への解答は、單に社會學のみならず、政治、經濟、歴史等の凡ゆる分野を含めた総合的な社會科學の知識體系の上にたつて始めて可能となるものであつて、特に心理學的考察を意圖したこの小論のなすところではない。従つてここでは便宜的に少數者集團を、集團としては極めて特殊な且つ社會經濟的水準においては極めて上向移動の制限された下位者群と考えることによつて、先の問題に對する解答を保留したまま、折衷的見地から集團の社會心理學的考察を續けてきたのである。それ故少數者集團の特殊性を強調する人、或は少數者集團とは近代社會においては完全に下層階級と同義語で

あるとみなす人は幾分不満をもつかもしいない。然しいづれの立場をとるべきにせよ、少数者集團への實證的な研究が何よりも先立つて必要とされることは認めねばならぬことであり、かかる意味からもこの小論は捨石としての意義を擔いうるであろう。

第二にこれは少数者集團研究に問題を提出しただけであつて解決を與えたのではないということである。確かにこの小論は「しからば少数者集團をいかにすべきか」の検討には觸れていない。然しかかる解決は一つの集團だけの分析にとどまるものでなく、集團間の心理學的考察を必要とするものである。例えばいかに少数者集團成員の敵對的態度を變化せんと試みたところで、多數者集團からの偏見が依然として消えな限り實際的には何の効果もないのである。従つて集團關係の心理學という廣大な研究領域を展開するに先立つて、極めて未開拓な少数者集團それ自身の實態を科學的に分析することの方が、より明確に將來の問題の解決に對する手懸りをえやすくと考えたからなのである。勿論集團間の敵對的關係の心理學的解決は、態度心理學上の見地からは一集團を單獨に取上げても行いうるものでもある。例えば社會的態度に參與する諸因子を分析し、それぞれをコントロールしようとする動機コントロール説 (*motivational control theory*)、知覺コントロール説 (*perceptual control theory*)、社會コントロール説 (*social control theory*) 等と名付けられる方法が極めて有效な心理學的方法であることは既に認められている。^{註1}然し枚紙の關係上かかる諸方法が少数者集團の場合、いかに活用さるべきかの根本的問題にも觸れなかつた。更にはかかる少数者集團の實態を明かにするという問題でも、より詳細に、その集團の蒙る偏見の

次元における實態、差別待遇における實態、他の集團との葛藤の次元における實態等の、それぞれの次元に分類して組織的に考察すべきであつたのであるが、これも將來の問題として殘したのである。

第三に我が國の少数者集團に對する論及の極めて少いという問題である。事實この小論では我が國の少数者集團の研究から利用されたデータは殆どない。この事實から、人が逆説的に我が國の少数者集團問題の特殊性に對して自信を深め、心理學無用論をとなえることがあつてはならない。寧ろここでは我が國少数者集團の特殊性という一般的自信を打破して、他のそれらと共通な研究のレベルにもちきつたことを意圖したものである。それにも拘らず、もしネガティブな効果しか與えないとするなら、再び我が國の社會科學の水準の低さをかこつより外ないのである。問題は我が國の少数者集團が特殊なる故にデータが利用できないのではなく、データの不足が問題の特殊性の限界すらもとせえないのである。——科學は特殊を對象としえないという偏見を除くことが先決なのであろうか——。

いま翻つて考えてみるに、他國においては異民族間の結婚、白人とユダヤ人及び黒人との混血兒が數多く目撃されるのに對し、我が國の多數者と少数者の集團成員間の結婚は殆ど起りえないことであつて、この兩者間の障礙が我が國の少数者集團の特殊性を示す決定的なものであるという見かたに對して、これを反駁する程の明確な論據を提供してこなかつた。一體先の結婚の例は、上流階級が下層階級の人と結婚し、大學出身者が小學校終了者と結婚する時にうける種々なる社會的拘束力とは全く異質的なものでさえあるのであろうか。外國の差別が皮膚の色や、

鼻の形等の身体的特徴に基いているといわれるなら、我が國の少數者が
 いわば心理的な理由で差別をうけているという事實が、問題をそれ程に
 異質的なものにするのであろうか。勿論われわれは各少數者集團の間に
 は重要な相違點があり、同化の強さもまちまちであるし、集團自身の性
 格や、周囲の集團の性格や、状況全體の構造によつても異るといふ如き
 少數者集團の特殊性を否定するものではない。(むしろこの事實は問題
 に對するわれわれのアプローチとは何ら牴觸するものではない。)然し
 それぞれ極めて特殊な事情をもつあの集團間の戦いですら、凡て本來人
 の心の中から始まるものであることを考えれば、我が國少數者集團の特
 殊性とか異質性とかは、そう考えること自體が既に彼等に對して武装し
 た態度なのではあるまいか。ここでは従つて一層包括的見地から我が國
 少數者集團をオリエンテーションし、將來の問題解決という課題に對す
 る豫備的考察をつづけたのである。

註 1 少數者と多數者間の集團關係や少數者集團成員のもつ「ひがみ」等の敵
 對的態度の實際的改善に對する考察は紙數の關係で省略せざるをえな
 かつた。従つてかかる實際的問題に興味をもつ人は(10)(15)(25)(26)
 等の文献を参照されたい。

参 考 文 獻

1. Adorno, T. W. et al. *The Authoritarian Personality*. 1950, Harper & Brothers, New York.
2. Beckham, A. S. *A Study for Race Attitudes in Negro Children of Adolescence Age*. J. abn. & soc. Psychol. 1934, 29, P. 18-29.
3. Bossard, J. H. S. *The Sociology of Child Adjustment*. 1948, Harper & Brothers, New York.
4. Brennan, M. *The Relationship between Group Membership and Group Identification in a Group of Urban Middle Class Negro Girls*. J. soc. Psychol. 1940, 11, P. 171-197.
5. Child, I. L. *Italian or American*. 1943, Yale Univ. Press. New Haven.
6. Child, I. L. *Socialization*. In *Handbook of Social Psychology*. Vol. II (ed.) Lindzey, G., 1954, Addison-Wesley, Cambridge. P. 655-692.
7. Criswell, J. H. *A Sociometric Study of Race Cleavage in the Classroom*. Arch. Psychol. 1939, No. 235.
8. Dood, S. C. *A Social Distance Test in the Near East*. Amer. J. Sociol. 1935, 41, P. 194-204.
9. Festinger, I. *The Role of Group Belongingness in Voting Situation*. Hum. Rel. vol. 1, 1947, P. 154-180.
10. Festinger, I. and Kelley, H. H. *Changing Attitudes through Social Contact*. 1951, Univ. of Michigan.
11. Hartley, E. I. *Problems in Prejudice*. 1946, Kings Crown. New York.
12. Horowitz, E. I. *Development of Attitude toward Negro*. In *Readings in Social Psychology*. (ed) Newcomb, T. M. et al. Rev. Ed 1952, Holt.
13. Johnson, C. S. and Masnoka, J. *Oriental and their Cultural Adjustment*. Fisk Univ. Soc. Sci. Source Documents. 1946, No. 4.
14. Kelly, H. H. *Communication in Experimentally Created Hierarchies*. Hum. Rel. 1951, vol. 4, p. 39-56.
15. Kretch, D. and Crutchfield, R. S. *Theory and Problem of Social Psychology*. 1948, McGraw Hill.
16. Lewin, K. *Field Theory in Social Science*. 1951, Harper & Brothers, New York.
17. Lewin, K. *Resolving Social Conflict*. 1948, Harper & Brothers. New York. (末永俊郎譯 社會的葛藤の解決 1954 創元社)
18. Lundberg, G. A. *Social Attraction Patterns in a Rural Village; A Preliminary Report*. Sociometry. 1932, 1, P. 77-80.
19. Marrow, A. J. *Living without Hate*. 1951, Harper & Brothers, New York.

- York.
20. Meenes, U. A. A Comparison of Racial Stereotypes of 1935 and 1942. *J. Soc. Psychol.* 1943, 17, P. 327-336.
21. Meltzer, H. Group Differences in Nationality and Race Preferences of Children. *Sociometry*, 1939, 2, P. 86-105.
22. Moreno, J. L. Who Shall Survive? Revised Ed. 1952, Nervous and Mental Disease Pub. Co. Washington.
23. Myrdal, G. *An American Dilemma*. 1944, Harper & Brothers. New York.
24. Sherif, M. and Cantril, H. The Psychology of Attitude. I and II. *Psychol. Rev.* 1945, vol. 52, P. 295-319.
- Psychol. Rev.* 1946, vol. 53, P. 1-24.
25. Sherif, M. and Sherif, C. W. *Group in Harmony and Tension*. 1953, Harper & Brothers. New York.
26. Sherif, M. and Wilson, M. O. *Group Relations at the Crossroad*. 1953, Harper & Brothers. New York.
27. Spoerl, D. T. Bilinguality and Emotional Adjustment. *J. abn. & soc. Psychol.* 1943, P. 56-57.
28. Stonequist, E. V. *The Marginal Man*. 1937, Scribners, New York.
29. Thibaut, J. An Experimental Study of the Cohesiveness of Underprivileged Groups. *Hum. Rel.* 1950, vol. 3, P. 257-270.
30. Williams, R. N. *The Reduction of Intergroup Tension*. A Survey for the Social Research Council. 1948.